

は鼻ひらめにひたひはれて、わきくそさへ花やかなる老人なりき、されど老らかにもてなし、あへしらひてかへし、は、人がらのにぎはしくたのもしげなればぞかしといひて、たかやかにわらひて、ゆかたびらなないがしろにうちかけて、つ、むべき所もおほひだにせず、立ちはしりつ、いぬる、いとばうぞくなり、

〔好色一代男一〕煩惱の垢かき

いか様是を只是置れじと、うす約束するより、はやあがり湯のくれやう、ちらしをのませ、浴衣の取さばき、○中略何國も替ることなし、

〔諸艶大鑑四〕心玉が出て身の焼印

川原町四條の角屋に湯屋あり、菊屋の小八、二階座敷に東山の風待ども汗のやむ事なし、彼湯に入にまかりて、役者まじりの人込、ざつと揚場に散しなど吞、明衣た、む間見合けるに、三十四五にて小作りなる男、そこねぬ鬢をなでける、○下略

〔萬の文反古五〕廣き江戸に才覺男

我等一萬兩の身體なれども、今に風呂屋へ供つれず、ゆかたをみづから自首にまきて入にゆき申候、

〔嬉遊笑覽二上〕望一千句、けいせいのかどく風呂よりあがりきて湯かたの袖も匂ふかよひ路、

〔多武峯少將物語〕ゆかたびらたゞのといかにせさせ給へらむと、あはれくとみたまふるに、○下略

內衣雜載

〔備前老人物語〕同人○水庵渡邊 風爐屋の竿に湯かたびらわり下帶數多かけ置、風爐をたく時は、男貳

人板の間におきて、垢かき二三人おきて用事と、のへさせ、○下略

〔出陣荷物貫定〕役武者荷積

一湯帷子 百六十目

一ツ